

驚異のアポリア：

驚くことの難しさを伝えることの難しさ

人間科学部 中村 博一



1998年4月より人間科学部教員。水生昆虫、魚類、鳥類を経て人間まで関心が進化してきた。この数年は西アフリカのリングウフランカ、ハウサ語—英語電子辞書（約4万語）を開発してきた（<http://maguzawa.dyndns.ws/>で10月より公開、越谷サーバーに申請中）。また松本市消防団第21分団で消防活動に従事し、危機と自治の思考を考察している。東武沿線の南東部出身ナイジェリアン・ディアスポラについても研究中。（なかむら・ひろかず）

（共通）文化人類学、人間科学部の文化人類学概論、生活環境論、比較文化論、社会文化基礎演習、社会文化調査実習などを担当している。受講者数は10人未満から300人以上まで。もともと大部屋系講師で100人以上を担当することが多かった。しかし今もって講義でしゃべるのが大の苦手で毎週が自己嫌悪の連続と言ってよい。今回は社会文化調査実習について主に書かせていただくことにした。

ブルーストやトルストイに触れながら歴史家が異化について書いている。「戦略とは、人間存在は予見可能であり、戦争、愛、憎悪、芸術は既成の処方箋で対処でき、知るとは現実から学ぶよりも、現実にある枠組みを押しつけることだ」という愚かな考えの具現である（ギンズブルグ2001、44頁）。」教えるというわれわれの行為についてはいかがであろうか。

1. 言語社会としての講義と言葉で考えること

講義や会議でアフリカのことをときどき話すので「アフリカって槍をもった人々が走り回っているのでしょうか」「暑くて大変ですね」「病気うつさないで、同僚や学生に言われることがある。西アフリカへ留学する直前、小金井市で特定疾患の医療扶助をもらうはめになったわたしは、相手がたぶん冗談半分で言っているなど思いながらもなんだか複雑な気分になる。関東の夏はスーダンサーヘル地帯よりもずっと暑くて過ごしにくいし、埼玉のほうが危険を感じると言ってもなかなか信じてもらえない。これはもちろん冗談ではない

のだが、北部ナイジェリアに行っても（！）大学制度があり、そこでおこなわれる「講義lecca」は、きわめて同じ構成の教室、同じ構成の時間的流れがあり、同じ構成の講師と学生がいて、ほぼ同じ経験をすることができるなんて言ったら大笑いされておしまい、かもしれない。講義という形態が大学生活の中心になったのがいつからか知らないし、本当はその逆かもしれないが、いくらわたしがにぶい教師とはいえこの奇妙さにはかろうじて気がつく、べきであろう。地球を半周近く旅してブラジルまであとわずか、こんなに文教から遠いところで同じシステムがあるなんて不思議このうえない。なにしろ西アフリカには地図がないと優秀な日本の人類学者がはっきりと書いた場所だから（信じられん！）。植民地の文化遺産だと言うのはたやすい。では日本は？日本で学ぶ大学制度はなぜどのように発展してきたのか、その頃西アフリカの大学制度はどうなっていたのだろうか・・・？思わずそんなことを考えたくなる。

火渡りの実演でもしないかぎり講義はだい

たいのところ言葉で成り立っている。このモノグラフも言葉で書いているように。言葉が基本の「教えるー学ぶ」「伝えるー伝えられる」習慣だろう。有限の音から無限の意味を生み出す言語は、人間様の文化を代表するものだと文化人類学の教科書に書いてある。これまで文教大学を含め数百人単位の講義が多い大部屋系人類役者としては、こちらが語り出せば、教室のどこからか木霊のように今語ったばかりの言葉が誰かの声で戻ってくる経験が何度もある。「この問題を考えるうえで・・・」「この問題を考えるうえで・・・」。忘れないため声に出してノートをとっているのだろうか。そう、単位をとるにも講義の言葉が使えなきゃならない。でもこうした講義は、語られる知識をカバーすれば終了なのか。語りのテクニックを伝授・習得すれば終了なのか。冗談まで「まねぶ」学生までいてなんとミメティックな過剰だろう、そんなこともときどき考える。講義が終わってやってくる学生がいる。「結局どういうことなんですか?」「あなたはどう思いますか?」「答えはどう書けばいいですか?」「あなたはどう書きたいですか?」。げげんな顔をして戻っていく。複数の学生は「なんだかコワイ」と表現した。「答えのない講義なんて講義じゃありません」。わたしのため息は深くなる*。自分が文化人類学を習ったはずの専門コースには概論や教養の講義は一切存在せず、存在しないことが重要だと学ばされたからだ。学ぶのには4年以上かかった。見て聞いて書いて自分で考えるのは本当に簡単じゃないし、経済的じゃない。

2. 調査実習の凋落

観察やフィールドワークや現場主義という表現はすっかり世の中に広まった。ずいぶん陳腐になったよなと実感しながらも自分でもよく使う。と使ったところで、その行為と実践（これも陳腐だ）でどうなってくるのかはこうした表現が陳腐に感じられるようになった今でも簡単には表現できないし、伝えるのは困難きわまる。だから逆説ながらこの 10

年で量も増え、図書館にたくさん所蔵されている調査やフィールドワークについてのすぐれた入門書や専門書を読めば読むほど、こんなんで調査できると語ってしまうと、こんなんでできる調査しかできないと、それはこちらの想像力を超えているかもしれない相手を感じとり、対象化できるような調査だろうかとついつい考えこんでしまうのだ。



大学周辺のトマソンを観測しているところ

人間科学部の旧社会学専修の実習科目が一年前社会文化調査実習とリニューアルされ、担当になった。対象は3年生。社会学専修はオーソドックスな農村調査を20年以上着実に実践してきたのだが、自分が担当になると話したとたん学生に引導をわたされた。「農村調査するのだったら誰もとりませんからね。」「・・・!」とても興味深い反応だった。どこへ行っても人間がいるかぎりおもしろいことはいっぱいあると思っているので、このような表現になる理由を考えた。長い歴史と伝統で調査実習観が典型化してしまったのかもしれない。典型化すると距離をとれず、対象化もままならない。アフリカでは槍もって走っている、みたいになるのでよくないのである。でもこうした反応は文教だけではなく。自主的な調査形態をとってきた埼大の文化人類学コースでも同じ現象が起っていたのだ。7年ほど前の檜原村の終了後調査したいと言う学生がいなくなった。問題化した調査論はさしおいても、ギョッとしたりスッゲーと感じたりする機会としてこそ調査科目は意義があると思う。わたしが消防団活動をしているのも同じことでギンズブルグも書いている。「異化とは私たちすべてがさらされ

ているある危険への対抗策だと思える。それは（私たち自身も含めた）現実を自明のものとして見ることである（前掲同所）。」驚異（オドロクこと）の天才ヘロドトスは人類学の父と教えている手前、学生との意識の温度差をどうにかしなければならなかった。手がかりは、人類学的観察を銀座の街角に適用したと書いている（でもどこまで本気で書いているかはちょっとあやしい）今和次郎の考現学や、不動産に付着した無用物トマソンを創造した赤瀬川原平の路上観察だった。彼らの考察はおもしろい。日常に溶け込んで見えないものはつくりあげる目線があってはじめて対象化される、現実になる、ということがわかりやすい。その目線は距離のとり方や異化と翻訳してもいいけれど、ところがこれを「教える」のは容易じゃない。いや、教えるのは容易だけどまさに反面教師、教えた側はにぶくて何も対象化できない、全然つままないということがよくあるのだ。以前には概論などのレポート課題にしたことがあった。一部の学生はくだらない！でおしまいだった。

「くだらない」ことをネチネチやりたい受講生が残るだろうか。残らなければ営業的には失敗だ。先立つ心配はそれだったので、オーソドックスな調査もできるようにメニューを用意した。信越国境にある調査地で、30年ほどの短期間に産産形態が劇的に変化した。その中心にいた人々にインタビューするというものだ。開講と報告の形態も工夫した。旧専修は通年コマだったが、春学期秋学期と2コマずつあるので学期ごとに別々に受講できるようにした。要するに各自の都合で半期で切りあげることもできるわけだ。開講時限については昼をはさんだ午前午後の配置を試してみたが、これは失敗だった。とりにくいという声が多く、今は連続にしている。ただ講義時間中に野外調査することを考えて春は4・5限に、陽が短くなる秋は3・4限にずらしてある。そして編集校正作業に大変手間がかかっていた調査報告は受講者自身がホームページを作成するやり方に変えた。

(<http://www.bunkyo.ac.jp/~koogenga/>)



地盤のゆるい北越谷的物件、ミラーの斜塔

こちらが用意したオーソドックスな調査は敬遠されたようだ。しかし、ボランティア活動で経験するホームレス像を描きたいと受講した者がいるので必ずしもそうではないかもしれない。初年度は春夏それぞれ5名程度、とりにくいと言われた2年目の昨年度は0名、正規ではない文学部と教育学部から1名ずつ、今年度は春が16名秋が21名である。個人でもグループでも構わないので自らのテーマとプランを立て、それに沿って進める。各年度ごとにひとつだけ例をあげよう。初年度：手相ではなく手の甲の比較研究。74人の手を撮影して本人の人生を刻みこんでいると言えるかを考察した。ちまたで言われているように見ただけではよくわからず、触れてみるのが大切だという結論になった。昨年度の例：ブロック塀の「すかしブロック」の研究。形態学、分類学、存在論から加工方法までをカバーしながらブロック塀史を考察することで戦後史を考える壮大なプラン。そのため現在も継続中であるが、受講者によるとつい最近すかしブロックを集めたホームページが開設されたらしいのでそんなにはずれてないなという印象をあらたにした。今年度の例：吸い殻考現学。たばこの銘柄と北越谷のイメージを路上で収集される吸い殻の銘柄との関係で考察する。次の写真は出津橋から北越谷駅まで吸い殻を収集しているところ。ご苦労様と声をかけられた学生もいたがボランティアで



吸い殻収集中の学生達

はなく研究活動である。この日は健康たばこと異なる中国銘柄と沖縄限定銘柄が思いがけない収穫であった。今年度の報告は10月末現在フロントページを作成中でおそらく11月中にはアップできるのではないかと思う。関心のある方は前記のURLを参照いただきたい。でも報告を見たらきっと、この程度かと思われるだろうからあらかじめ釘を刺しておこう。人を見てこの程度と思って自分でや

ってみたらその程度だった受講者がいる。結果が印象深くおもしろければそのほうがいいに決まっているが、結果はあんまり重要じゃない(ちょっと言い訳がましい?)。異化のプロセスを自分で生きてみるほうが重要なのだし、問いは今もなおすべての人に開かれているのだから。そして、「答えのない講義なんて講義じゃありません」という厳しいコメントに対する複数の答えがここにはある。

注* 教養の文化人類学教育については『教室の中の人類学』のテーマで昨年7月に日本民族学会関東地区懇談会がとりあげた。他大学の担当者のため息も結構深そうだった。

文献 カルロ・ギンズブルグ 2001『ピノッキオの眼』せりか書房；中村博一 1998「菊と仲間」『社会と象徴』岩田書院 所収